

能登總持寺祖院觀音菩薩像と永光寺瑩山紹瑾禪師像

著者	薄井 和男
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	22
ページ	5-12
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000320



能登總持寺祖院觀音菩薩像と永光寺瑩山紹瑾禪師像

神奈川県立歴史博物館 薄井 和男

皆さん、こんにちは。神奈川県立歴史博物館の薄井と申します。本日は、このシンポジウムの基調講演ということで、お話をさせて頂くんですけども、こんなに立派な会場で、なかなか、上手い話が出来ますかどうか、不安なところもございます。私はこの度の總持寺様の展覧会実行委員として加えさせて頂いております。そういったご縁もございまして、今日は、お話を、ということなんです。先ほどのご紹介にもありましたように、私は曹洞宗の仏教美術に関しては、さほど詳しくはございませんので、今日は、後から質問があるということで、「あまり突っ込まれた質問をされると困るな」という風に、最初からちよつと思っているところでございます。

ずっとライフワークとしまして、仏像彫刻を中心とした調査研究を行ってまいりました。そういった中で、かなり多くの県内・県外の、お寺等の悉皆調査等を長年にわたって、させて頂いております。その中には、曹洞宗のお寺も大変多くございまして、そういったお寺の仏像調査等もずっとさせて頂いております。ただ、ずっと調査をしてきているんですけど、実際のところ、曹洞宗の仏像については、あまり調査としての成果は上がってはいない、ということもございます。と申しますのは、ご承知のように、一般的に、曹洞宗は、中世末から近世において、全国的に広く展開をし、大変多くのお寺があるのですが、そこに安置されている仏像彫刻を見ますと、これは、禅宗という部分ももちろんあるんですが、種類においてそれほど多くはないんです。曹洞宗のお寺に入りますと、ご本堂があり、中には当然、ご本尊がありますけれど、大体、お釈迦さんが本尊であることが多いです。近世以降のものと、多く

は釈迦三尊ということで、釈迦如来と文殊菩薩、普賢菩薩、多くは、文殊菩薩が獅子に乗って、普賢菩薩が象に乗っている、そういうスタイルのものが多いです。その釈迦を中心とする三尊仏、それから、その両側には、禪の祖であります達磨大師と、伽藍を守る大権菩薩という伽藍神が祀られています。これが曹洞宗の本堂の中の一般的な形態です。それに付随して、多少細かい像が安置されているケースもありますけれど、全体に共通しては、これが基本です。それから、本堂の裏手に当たるところに位牌堂、大きいお寺で言いますと開山堂がありまして、そこに祀られているのが、承陽大師、常済大師、一般的には道元さん、そして瑩山さんという、お二人の高僧像が祀られており、プラスそのお寺の開山像といったものが祀られています。これが一般的な形で、私も曹洞宗のお寺と言いますと、そのイメージが常にあります。

その中で、最近になりました、曹洞宗の、特に古いお寺ですね、道元さんから瑩山さんに至る間に創建されたお寺の調査が随時、断片的にですが、次第次第に行われてきておりまして、そこから色々な成果が上がってきております。その中で、分かってきたことは、例えば、永平寺においては、ご本尊は三世仏という仏様が祀られています。三世仏というのは、お釈迦さんと、阿弥陀さんと、弥勒さんという三像です。これは「三世」ですから、過去・現在・未来を象徴していると考えられます。この三尊が祀られている。これは、曹洞宗だけでなく、臨済宗でも三世仏を祀っています。これは中国からの伝統です。鎌倉ですと、五山の一つ、浄智寺が三世仏を祀っているということがあります。それから、瑩山禅師のお開きになりました、洞谷山永光寺、これも大変に有名なお寺ですが、永光寺はご本尊がお釈迦さんですが、これに、観音さんと虚空蔵さんが両脇に祀られている形態になります。普通は、お釈迦さんですと、脇侍は文殊・普賢というのが基本形なのですが、永光寺では、釈迦・観音・虚空蔵という祀り方になります。これは、いわゆる『華嚴経』の教義、華嚴思想の中において、毘盧遮那仏をその中心仏と考える考え方、これは奈良の東大寺がそういう考え方になりますけれど、その際には、両脇侍が観音菩薩と虚空蔵菩薩になるんですね。まさにこ

の永光寺の三尊仏の祀り方というのは、毘盧遮那仏とお釈迦さんが同体であるという、華嚴教義の考え方の上に立つて安置されているということになります。いわゆる護国の寺と言いますが、そういう思想のもとに安置されているということが分かります。このように曹洞宗の古い時期のお像については、近世に入ってからからの祀られ方とは少し違っているような所も分かってきましたし、それがむしろ本来の形態なのだろうと、今日、分かりつつあるという状況ではないかと思えます。

この中で、特に北陸地方の曹洞宗の古いお寺の中から、大変に古い作品というのが、次第に紹介されてまいりました。そういうものの中には、大変に重要なものがあった、本来的な曹洞宗で信仰されていた尊像形態というのが、より明確になりつつあるというのが、現在の状況ではないかと思えます。

今日はその中で、とくに重要であると思われる、二つの像です。これは、今般の展覧会にも出陳されているものですから、間近でご覧頂いた方もおられるかと思えます。私も間近で調査をさせて頂いたことがございます。今日は、これらを、その代表ということで、ご紹介させて頂きたいと思えます。

まず、正面に写真が映っておりますが、これが能登の總持寺祖院の觀音菩薩の坐像です。この像は輪島市の指定文化財になっております。ご承知のように、總持寺の祖院は、明治時代の火災を契機にこちらの鶴見に移転する以前に、本来總持寺として創建されたお寺であります。この創建に関しましては、有名な『觀音堂縁起』という縁起がございます。これによって、總持寺は元々が、能登のこの地にあった諸岳觀音堂というお堂が前身であって、それを瑩山禪師が、定賢権律師という方から寺領などを譲り受けて、そして總持寺が創建されたということが、由来として述べられているわけです。そして、この前身である諸岳觀音堂が元々は、行基菩薩が開創した密教の古刹であったとも言われております。この諸岳觀音堂のご本尊であったお像、この像こそが、現在、總持寺祖院の觀音堂に祀られております。總持寺祖院の慈雲閣という觀音堂ですが、こちらのご本尊として祀られている觀音像であるとされてきており

ます。これがその像で、今回の展覧会にも出陳されております。この像は、展覧会では白衣観音と呼んでおりまして、平素は秘仏です。像高が三〇・七糎と大変小ぶりなお像です。(スライドが変わって) これがお像でございますが、こうやって見ますと立派なお像に見えますけれど、像高で三〇・七糎と大変小ぶりなお像です。頭部に宝髻を結び、天冠台を表わし、そして宝冠を被っております。一般的なお像のように、白毫相を額の中央にあらわしまして、着衣は衲衣を着けて、定印を結んで結跏趺坐をするという形で作られております。

制作方法は、寄木造で眼には玉眼を嵌めております。この像の構造は、頭と体部を通して基本的には前後矧ぎで作られております。寄木でありまして、三道下、首の下で割首といって、割り離しをしております。それに脚部に横材を寄せているという、一般的な木寄木になるものです。

(スライドが観音像から永光寺の三尊像に変わって)これは、永光寺のご本尊ですね。この像は、先ほど申しました、観音と虚空蔵を両脇侍に従えている三尊形式のお像でございます。これは後ほどお話を致します。

今、見てまいりましたように、この像(祖院の観音像)の造形的なことを言いますと、ちよつとずんぐりとした造形ですね。体つきもちよつとずんぐりとしたかたちに特徴がございます。それから衣のひだはやや大ぶりで、うねるような形をしております。後ほどお見せしますが、お像の中もちよつと構造が変わっております。お像の真ん中の所に束を立てて、お像の中心部を支える像心束という繋ぐ構造をとっていることも特徴ですが、この像は、一見して造形的な面、あるいは構造的な面に大変特徴がございます。その特徴とは、中世の彫刻の中で、同じような特徴を持った一群がありまして、これが、大体鎌倉時代の終わりぐらいいから南北朝時代、室町初期くらいまでのお像の中で、院派仏師という一団が作ったお像に、共通して見られる特徴なんです。このお像についても、確実な銘はないのですが、特徴から見て院派の仏師の作例であると言いうことが出来ます。

院派仏師というのは、鎌倉時代の終わりぐらいいから、顕著な活躍が、関東あるいは中央においても、見られるので

すが、その中で、特に足利將軍家のお抱え仏師になりました、院広とその親である院吉という親子仏師がおります。この仏師の作りました作品というのが、このお像と大変よく似ている。これが院広の作った代表的なお像ですが、観応三年（一三五二）に作られたといわれる静岡県の奥山方広寺の釈迦三尊像です。方広寺は臨済宗方広寺派の本山です。これと大変よく形が似ていることが、写真を見ただけでもお分かり頂けると思います。恐らく、この手の作風を引くお像であることが、一見して分かるわけです。（スライドが変わって）大きさがだいぶ違うのですが、こうやって見ますと、そっくりと言つていいと思います。この院広周辺の仏師が作りました作風を引くお像というのは、この時代、十四世紀の半ばになりますが、全国的に大流行致します。足利將軍家の作りました、京都の等持院という尊氏の菩提寺のご本尊なども、院派仏師によつて作られているということから、時代のスタンダードになっていたということです。それが良く分かります。そして、この院派仏師の作品というのは、臨済宗あるいは律宗系のお寺に数多く残っているのですが、曹洞宗においても初期のうちから、院派仏師の作品が見られるということが、次第に分かってきました。

一つ前に見ました永光寺の三尊仏も、そのスタイルから院派の作品であるということが分かるわけです。瑩山禪師の『洞谷記』の中に、永光寺のご本尊のうちの観音菩薩は、院派仏師の駿河法眼定審という仏師が父親の十三回忌の菩提のために作ったという旨の記録があるということが書かれております。この定審という仏師は、「院」の字が付かないのですが、院派仏師の一人なんですね。これは、横浜市金沢区にあります称名寺の釈迦如来像を院派仏師が作っているのですが、その中にも（定審の）名前が出てくるため、院派であることは明白です。そういうことから、永光寺の最初のご本尊を院派仏師が作ったということが、明確に分かるということになります。臨済宗あるいは律宗の他にも、曹洞宗においても、院派仏師というものが、初期の段階から、その造仏に深く関わっていたことが、次第に分かってまいりました。能登地方の曹洞宗寺院のお像を調べてみますと、院派の息のかかったものというのが、散見することが知られます。臨済宗だけでなく、院派と曹洞宗の結びつきというのは、大変強いものがあつたことは恐らく、

間違いないだろうと考えられます。永平寺の三世仏についても、時代にばらつきはありますが、その内の二体については、完全に院派のスタイルをとっていることが分かりました。

この作品の、箱形の特徴的なずんぐりした造形というのが、お分かり頂けるかと思えます。(スライドが変わって)横からみますと、体奥はあまり深くないですね。鎌倉時代の前半の像のような体奥の深さというのは、さほどはありませんけれど、ごろりんとした印象があるうかと思えます。(スライドが変わって)背面です。背面も衣文が大ぶりでありまして、余り細かくないことがお分かり頂けるかと思えます。(スライドが変わって)面側です。顔もやや四角っぽいというか、そのようなところがありましようか。(スライドが変わって)像底です。像底のちょうど真ん中の部分にございますのが、像心束です。これが、この時期の院派仏師の作品に顕著に表れるものです。それから、体の前面材と背面材を束のような雇柄でもって結びつける、こういうやり方も、この時期の院派仏師の特色で、我々彫刻をやっている者は、だいたいひっくり返しまして、この形を見ますと、「あ、院派だな」と分かるのですけれど、祖院の観音さんも、典型的な院派のスタイルを持つていると言っていると思われまます。

(スライドが変わって)それでは、本日のもう一つの重要像でございますが、これが、永光寺の瑩山紹瑾禅師の木像です。この像は、やはり道元禅師から瑩山禅師に至る、曹洞宗のごく初期の造像に位置づけられる非常に古手の像と言ったことが出来ます。一般的に、頂相彫刻と呼ばれる、禅僧の肖像彫刻の代表的なものです。臨済宗においても、大変数多くのお像が作られておりますが、永光寺の瑩山さんのお像というのは、曹洞宗における頂相彫刻の傑作の一つと申し上げていいと思います。禅宗には師匠から弟子に付法する際の際として、頂相画が授けられるという伝統があります。そこには、椅子に坐り、法衣を前に垂らした全身像、このスタイルのものが描かれています。それをそっくり彫刻にしたものが頂相彫刻ということですね。頂相彫刻は、禅宗寺院の仏殿、あるいは、禅宗寺院の寺院内寺院である塔頭・中院にもよく祀られております。多くはそのお寺の開山であったり、あるいは祖師にあたるもの、あるいは

はそれぞれの派祖の僧侶のお像であるというケースもございます。大変数多くの頂相彫刻が作られてまいります。永光寺においては、頂相彫刻が、法堂の裏手に伝灯院という開山堂がございまして、その中に祀られております。(伝灯院には像が) 大量に祀られておりまして、道元禪師も当然祀られておりますし、それ以外にも、歴代の高僧、お祖師さんの類がまとめて安置されております。その中で、瑩山禪師の像は、開山像ですが、群像の中でも、最も優れたお像であるということが言えるかと思えます。(スライドが変わって) 横へ振ってまいりますと、お堂の中に安置されている状況です。形は一般的な頂相彫刻の典型をしております。

頂相彫刻というのは、特に、頭部の写真に大きな力点が出てくるところがございまして、生前の姿をそのままに写している、中には寿像と言って、生きておられるうちに制作される例も多く見られます。(スライドが変わって) これが像の像底ですが、やはり、雇柄といつて寄木造りで作られている体の前面材と背面材を、それぞれ柄を出しまして、中央でくっつけるやり方で制作している所の特徴がございまして。(スライドが変わって) この部分ですが、前材と後材から束を出しまして、これを中央で緊結するというやり方です。これが首のところにあります。体部が完全に内割りで丁寧空洞が作られております。(スライドが変わって) これは、裾の部分にあります銘でして、この銘によりまして、このお像が、瑩山禪師のお像で、(瑩山禪師が) 亡くなった正中二年(一三二五)に、永光寺二祖の明峰素哲禪師によって作られたお像であることが分かります。こういったことから、大変リアルに出来ている真影と言いますか、生写しと言いますか、そういうことで作られたお像であることが、歴然とこのお像に表れているということになるかと思えます。

(スライドが変わって) このお像と同時期、同様な構造のお像を見えますと、たとえば、その中の一つであります、建長寺の塔頭であります正統院に祀られている高峰頭日の頂相彫刻は、正和四年(一三一五)に作られた寿像で、院派仏師の院恵作であるということが分かっております。このお像は、瑩山禪師のお像と同じような時期に、同じよう

な仏師によって作られている一つのモデルになるのではないかと思えます。(スライドが変わって) こちらは瑩山禪師の上半身のアップですが、頭部の大変リアルなところ、それと写真では分からないのですが、左耳の後ろには、疣が表現されておりまして、瑩山禪師の大変にリアルな真影をそのままに写しているお像であるということが分かります。(スライドが変わって) これは同じような位置から見た高峰顕日のお像ですが、やはり大変に迫真的な造形であることが分かります。(スライドが変わって) これは瑩山禪師ですね。(スライドが変わって) 今度は高峰顕日ですけど、多少のニュアンスの違いは、写し方などで違って見えるかもしれませんが、瑩山禪師のお像も、正直なところ、高峰顕日像と負けることなく、と言いますか、大変にリアルな印象をもったお像であると考えてよろしいかと思いません。

(スライドが変わって) これは、伝灯院の中に祀られている峨山禪師のお像です。このお像は、瑩山禪師のお像と比べると、表現が観念的と言いますか、理想化が入ったような感じが致します。それは、体部の造形もさることながら、頭部の表現などにはつきり出ております。この頭部、面貌には多少、表現を理想化したようなところが見受けられ、それが、作られたのが少し時代が下がるかと考えられる原因であります。(スライドが変わって) これも同様に、伝灯院の中の一体です。明峰素哲禪師の木像だっただと思えますが、この像もやはり、やや理想化の見られる作品で、頭部を見ますと、生写しと言うよりは、写実プラス理想化というものが感じられるかと思えます。

このように一つのお寺の一つのお堂の中のお像で比べましても、お像の制作時期の前後が感じられるわけで、中でも瑩山禪師のお像が古く、曹洞宗を代表するお像であるということが、これらのことから分かるわけでございます。簡単ではございますが、二つのお像の特徴についてご紹介をさせて頂きました。